

アントーニオ・スクラーティ、望月紀子訳『私たちの生涯の最良の時』

(2020 青土社)

小田原 琳

(東京外国語大学)

白い布を持ちあげてあの人の顔を眺めた、
いつものように屈んで口づけをした。
それが最後だった。いつもの顔が、
ほんの少し疲れていた。いつもの服、
いつもの靴だ。そしてあの手が
パンを砕いたり葡萄酒を注いでいたのに。
今日はまだ移りゆく時のなかで、あなたは白い布を持ちあげて
これが最後と、あの人の顔を眺める。
街路を歩いていても隣りには誰もいない。
恐怖に襲われても握ってくれる手はない。
(ナタリーア・ギンツブルグ「思い出」⁽¹⁾)

歴史

三つの家族の物語を通じて、イタリアという土地に生きた人びとの経験した20世紀が浮かび上がる。一つはイタリアでもっとも有名な家族の一つであるギンツブルグ家、二つは著者の両親の家族であるスクラーティ家とフェッリエーリ家である。後二者は、いわゆる「名もない」と形容される、市民である。

三つの家族はイタリアの20世紀を生きる。ギンツブルグ家は革命派ではあったが、当時ロシア領であったオデッサをボルシェビキ革命に押し出されてイタリアに流れ着いた。スクラーティ家のアントーニオ（著者の祖父）と結婚したレカルカーティ家のアンジェラの次兄は、イタリアがヨー

ロッパで列強に並び立つことを示そうと無理に参戦した第一次世界大戦の、記録的な敗北となった戦闘（カポレットの大敗北、1917年）で脚を負傷し、生涯にわたって杖をつくことになった。イタリアは第一次世界大戦の戦勝国の一角を占めたが、その見返りは期待したほどには大きくなく、その失望がファシズムという運動を生むに至る。1923年以降ファシスト党は政権党となり、翌24年には、社会党の国会議員マッテオッティを拉致・暗殺して、25年以降独裁体制を強化してゆく。共産党の創設（1921年）メンバーの一人であるアントーニオ・グラムシが逮捕されたのは、1926年のことである。レオーネ・ギンツブルグがイタリアの市民権を取得した1931年には、ファシストは大

学教員に体制への忠誠を宣誓する署名を課した。レオーネは教授資格者まで宣誓義務が拡大された際に宣誓を拒否して、大学から追放された。1935年、イタリアはエチオピア侵略に成功し（アビシニア戦争）、国民のファシスト党への支持は最高潮に達する。スクラーティ家のアントーニオは、エチオピア侵略後にイタリアが経済制裁を受けていたときに呼びかけられた羊毛の寄付に応じなかったという。エチオピア侵略の年、トリーノの反ファシズム運動「正義と自由」が弾圧を受けた際に、レオーネは逮捕され、2年間収監された。1938年、ユダヤ系イタリア人に対する、市民権の剥奪や公職・高等教育からの追放等を定めた一連の人種法が公布され、レオーネ・ギンツブルグはイタリアの市民権を剥奪される。多くのユダヤ系知識人が亡命するなかでレオーネと、38年に結婚した妻ナタリーアはイタリアに残ることを選択し、1940年からイタリア半島中部アブルツォの小さな町ピッツォリに流刑となった。この年イタリアが第二次世界大戦に参戦し、エジプトやギリシャに侵入する一方、トリーノ、ミラーノ、フェッリエーリ家の暮らすナポリも連合軍の空襲を受けるようになるが、ナタリーアはしかし、流刑地で過ごしたそのときを、「平穏な日々」と表現している⁽²⁾。ギンツブルグ家の悲劇はこのあと、日本ともドイツとも異なるイタリアの第二次大戦の末期のなかで到来するからである。

連合軍がシチリアに上陸し、敗戦の見通しが濃厚となるなか、1943年7月25日、国王ヴィットーリオ＝エマヌエーレ3世の支持を得たファシズム大評議会（ファシスト党の、すなわちイタリア国家の最高議決機関）はムッソリーニ首相の罷免を決議し、ムッソリーニを逮捕した。ファシスト体制の一応の終焉である。8月の最初に、レオーネは流刑地ピッツォリを離れ、9月にローマへ向かった。9月8日、ムッソリーニに替わって首相となったバドリオ（もちろん元ファシストであり、

アフリカ侵略において大量虐殺を行った元帥である）は、連合軍との間の休戦を発表する。それはバドリオと国王一家の南部プリンディジへの逃亡と、ナポリ以北のドイツ軍占領をともなった。戦争そのものは、終わらなかったのである。ナポリ市民は連合軍を待つことなくドイツ軍に対して蜂起し、著者の祖父ペッピーノ・フェッリエーリもそこにいた。ドイツ軍は監禁されていたムッソリーニを救出し、スクラーティ家の暮らすミラーノ近郊の小村クザーノ・ミラニーノを含む北部地域は、ムッソリーニを首長とするイタリア社会共和国とされた。首都＝無防備都市ローマは、北イタリアの諸都市と同じく、レジスタンスと占領軍との苛烈な戦いの場となる。レオーネは非共産党系の反ファシズム政党「行動党」の機関紙『自由イタリア』の責任者としてそこに加わった。ドイツ軍にとってはファシストをのぞくすべてのイタリア人が潜在的に抵抗者であったから、占領地域では民間人虐殺やユダヤ人迫害が激化する。11月初めに、レオーネはドイツ軍に逮捕された。拷問の末、1944年2月に獄死する。イタリアの戦争は、1945年4月25日、レジスタンスの一斉蜂起による北部諸都市からのドイツ軍の追放をもってようやく終わる。

ナタリーア（1950年に再婚）と子どもたち、スクラーティ家とフェッリエーリ家は、ファシストによる逮捕の危機や戦争、貧困を辛くも逃れて命と歴史をつないだ。1946年6月、戦後初の国政選挙は女性が参政権を行使した初めての選挙でもあり、多数の女性議員が誕生し、イタリア国民は共和制を選択した。レジスタンス経験は戦後の政治的正統性の参照点となった。「経済の奇跡」と呼ばれる戦後の復興のなかで、スクラーティ家のルイージは、繁栄するイタリアの象徴のようなデパート・リナシェンテ（イタリア語でルネサンス、再生の意）の幹部として一族で初めてクザーノ・ミラニーノを離れ、ナポリでたくましく生きる

ロザリーア・フェッリエーリと出会って、著者が生まれた。

労働

本書が背景とし、登場人物たちの生に一定の方向性を与えた歴史は以上のものである。イタリア現代史のもっとも苛酷な時代で、戦争犯罪と植民地犯罪と骨がらみになっているがゆえに、イタリア半島の内外でその犠牲になった人びとにとってはより一層そうであったことは想起しておくべきだろう。文学作品や歴史書を含めてファシズムに対する抵抗の語りの多くはイタリア半島内の経験に閉じ込められてしまうのだが、本書は、大文字の歴史を個人史と並行させることで、それを回避しようとしている—たとえば「エチオピア皇帝ハイレセラシエー世がこのようなことばで国際連盟の会議場と世界にむかって、彼の国民に対するイタリア軍の化学兵器使用を告発したのは一九三六年五月一二日である。レオーネがトリノ帰還をはたしてから二か月もたっていない」(88)のように—ことは、21世紀のイタリア史叙述として興味深いが、踏み込まないでおく。個人史と大文字の歴史をつなぐもう一つの結節点は、労働である。

レオーネ・ギンツブルグは、文学、翻訳、文献学にごく若いころから才能を発揮したきわめて優秀な研究者であり、ローマ市内の彼が逮捕された場所に掲げられた碑文に「ヨーロッパ／統一運動の理想と／構想に情熱をささげたイタリア人〔中略〕彼の思い出は生きつづける／真の自由を求めて／闘う者の胸のうちに」⁽³⁾とあるように、また本書に引かれている彼の同志たちの記憶にあるように、決然たる反ファシストとして尊敬を得ていた。だが本書では、彼の仕事—高校の同窓生ジュリオ・エイナウディが創設した出版社、エイナウディの編集長—が、彼の反ファシストとしての活動の重大な部分を占めていたと描かれる。エイナ

ウディ社で「歴史文化叢書」、「注解付きイタリア古典新選集」、「外国人作家翻訳集」、「評論集」といったシリーズを開始し、「これらの出版物のすべてに妥協のない厳密さ、注意深い細心の見直しをあて、すべての本に理解を助ける明快な序文をつける」(90)という彼の仕事は、具体的にはアリオストの『狂えるオランダ』の「無数の異稿の点検」(101)であり、レオパルディの『カンティ』の「先行する校訂版の編者たちの仕事を虱つぶしに調べ」(110)ることであり、「ひどい人手不足のこの時期、ゲラの訂正は、莫大な費用がかかるうえに、通常の二倍、三倍もの時間がかかることを理解してほしい」(148)と抗議する社長と、流刑地から郵便を通じてけんかすることであった(執筆や出版にかかわったことのある人なら、レオーネの仕事が気の遠くなるようなものであること、エイナウディ社長の文句もさもありなんであることを、容易に想像できるだろう)。レオーネ・ギンツブルグの出版方針を著者がまとめるとこうなる。生者と死者との共有関係。「父親たちが、父親の父親たちがなした善きこと、正しいこと、美しいことは、ぼくらにまで到達するがゆえに虚しくないのだ〔中略〕。いまだ創造されずにいる時代の未知の読者にたいする友情と賛同と連帯感。これが掛け金だ」(125)。

宗主国において、植民地において、侵略された土地において膨大な死者が生み出されていた時代に、生存の権利を剥奪されていたその人が、労働を通じて未来を創造する。そのとき、労働は闘争であるといえるだろう。したがって、ギンツブルグのほかに描かれるスクラーティやフェッリエーリの人びとの労働も、私たちはそういうものとして読むべきだ。ペッピーノ・フェッリエーリは、貧しい家計にまったく潤いをもたらさず、次第に嫌々ながら肉屋業を本業とするしかなくなっても、芝居、とくに人形芝居への情熱を捨てなかった(いまでもナーポリのおみやげの定番は、人形

芝居用の人形である)。社会主義者のアントーニオ・スクラーティが(ムッソリーニが愛してやまなかった⁽⁴⁾) アルファ・ロメオ自動車工場でファシスト体制下から戦争中もかわらず「フライス盤をまわしつづけ」(84)、かわらず社会主義者でありつづられたのは、高度な技術をもつ熟練工であったことに助けられたことは疑いない。ペッピーノの妻イダは年齢を偽って工場で働きはじめた12歳のときから生涯共産党員であり、三人の子どもを貧窮にもファシストにも連合軍・ドイツ軍双方の空襲にも負けずに育て上げた。1943年冬、イタリア社会共和国のミラーノでルイージ・スクラーティの母は、営んでいた文房具店に逃げ込んできた共産主義者の隣人を行動隊(ファシスト党の軍事部門)から守ろうとした(息子のルイージは別の共産主義者の隣人に救われ、二人の共産主義者は銃殺された)。1990年代以降、イタリアでも歴史修正主義的な議論がひろがり、ファシズムの過去の矮小化と、レジスタンスの意義の過小評価がみられるようになった。その主張の一つは、レジスタンスに参加した市民は一部であって、ファシストとの闘いはマイノリティ同士の抗争であったのだというものである⁽⁵⁾。日々の労働が未来への闘争であるとき、そのような議論はいかにも卑小だ。

家族

本書は三つの家族を扱うが、私たちがイタリアと聞いて想像するような、通俗的な家族主義の匂いはどこにもない。

「そうなのだ、なぜならば、よく考えれば、一九三九年はレオーネ・ギンツブルグにとって第二次世界大戦が始まった年ではない。彼が父親になった年なのだ」(125)。こうして生まれたカルロ・ギンツブルグは現代イタリアを代表する国際的な歴史家である。歴史に痕跡を残すことのできない者たちをめぐるグラムシのノートに導かれて

「ミクロストリア」(マイクロヒストリー、村落共同体や個人など微視的視点に立つ歴史叙述)の潮流を率いた。16~17世紀の北イタリア、フリウーリの農民たちの農耕に根ざした非キリスト教的信仰を解明する『ベナンダンティ』⁽⁶⁾、「鉛の時代」とも呼ばれる60年代末から80年代にかけての、ネオファシストと新左翼、権力の武力衝突のなかで起きた警官殺害容疑で告発された友人の無実の証明を試みる『裁判官と歴史家』⁽⁷⁾、アウシュヴィッツという、証言の存在しないできごとと歴史叙述の関係を問い、歴史への信頼を論じる「ジャスト・ワン・ウィットネス」⁽⁸⁾などが日本語で読むことができる。カルロ・ギンツブルグは父について語ったインタビューの冒頭で、「個人的なことはやめておきましょう」ときっぱりと断る⁽⁹⁾。「サンドロ・ペルティエニ[イタリア社会党の政治家。1978年から1985年まで共和国大統領]は自伝のなかでこう書いています。尋問のあと、腫れ上がった顔をした父が、彼に言いました。『ドイツ人を憎むべきではない』。なぜこのようなことを?二つの説明をしようと私は思います。第一に、彼はヨーロッパ連邦の構築を政治的に確信していたということです。ドイツはそこで当然重要な位置を占めることになるでしょう。第二の説明は、母宛に書いた最後の手紙にあります。そのなかで父は別離を予期して書きました。『ぼくをもっとも苦しめることの一つは、周囲の人たち(ときにはぼく自身)が個人的な危機に直面すると、容易に全体的な問題意識を失ってしまうことだ』。父と息子は小さな一人の経験で全体的な絵柄を描くことを願う。ペッピーノ・スクラーティは、幼なじみで偉大な喜劇役者となったトトーとの再会を子どもたちに話し、子どもたちがその子どもたちにそれを話すことを予感する。家族は、記憶を伝え歴史に変える媒体以上のものではない。しかしたしかにその動力は、痛ましいほどの愛情であるのかもしれない。愛するナタリーア、ではじまり、三

度の口づけで終わるレオーネの最後の美しい手紙は、本書のほか、レジスタンス刑死者の遺書を集めた『イタリア抵抗運動の遺書』(P.マルヴェツィ・G.ピレリ編、河島英昭・望月紀子他訳、富山房、1983年)で読むことができる。

抵抗

最後に、本書と交差する、日本語で読むことのできる多くの本のなかからごくわずかを挙げておく。すでに触れたナタリア・ギンツブルグ『ある家族の会話』、河島英昭『イタリア・ユダヤ人の肖像』、『イタリア抵抗運動の遺書』のほか、レオーネ・ギンツブルグとともにトリノの「正義と自由」のメンバーであったカルロ・レーヴィの『キリストはエボリで止まった』(岩波書店、2016年、竹山博英訳)は、ファシストに逮捕され流刑になった南イタリアの寒村での、「もうひとつの文明」との出会いを描く。レオーネの同級生でエイナウディ社でもともに仕事をしたチェーザレ・パヴェーゼの描く流刑の風景は、それとは正反対にどこまでも著者自身の自由と孤独しか写さない(『流刑』岩波文庫、2012年、河島英昭訳)。同じくパルチザンに加わったユダヤ系イタリア人だが、レオーネらとは出会わなかったプリーモ・レーヴィは『これが人間か』(朝日新聞出版、2017年、竹山博英訳)で、移送されたアウシュヴィッツにおける「剥き出しの生」(ジョルジョ・アガンベン)を語った⁽¹⁰⁾。ナタリア・ギンツブルグの作品を高く評価したイータロ・カルヴィーノの『くもの巣の小道』(筑摩書房、2006年、米川良夫訳)の、社会の落伍者たちからなるパルチザン部隊の、滑稽な高貴さ。ファシスト党を支持しながら、人種法によって大学を追放された医師で大学教授の祖父、ユダヤ系であることを隠して生き延びた父をもつセルジョ・ルツァットは、現代イタリアにおける修正主義という『反ファシズムの危機』(岩波書店、2006年、堤康徳訳)

を鋭く告発する。いずれも、「抵抗する人」(本書献辞)の仕事である。

レオーネ・ギンツブルグが宣誓を、すなわちファシズムを拒否したとき、「ロマン主義の高らかな鐘」(10)は鳴らなかった。抵抗すべきであると認識し、決意し、実践しなければならない瞬間は静かに訪れるのだらう。私たちはその決定的な瞬間を、もうすでに逃してしまったのではないかという恐怖にふと襲われる。しかしたとえそうであったとしても、日々の労働を通じて、自由の剥奪に抵抗する契機は残されている。そうして、過去から送られた連帯に、私たちは応えるのだ。

註

- (1) Natalia Ginzburg, *Memoria* (1944). 翻訳は河島英昭『イタリア・ユダヤ人の風景』(岩波書店、2004年)、134-5ページ。なお、イタリア語の姓としてのGinzburgは日本ではギンズブルグと表記されることが多いが、ここでは本書の訳者にならって「ギンツブルグ」としている。
- (2) ナタリア・ギンズブルグ『ある家族の会話』(白水社、1985年、須賀敦子訳)、210ページ。
- (3) 河島前掲書、116ページ。
- (4) Alfio Manganaro, 'Il Duce e la passione per l'Alfa Romeo' in *La Repubblica*, 21 aprile 2015, https://www.repubblica.it/motori/sezioni/classic-cars/2015/04/22/news/il_duce_e_la_passione_per_l_alfa_romeo-112600868/ (2020年10月31日アクセス)。
- (5) イタリアの歴史修正主義については拙稿「経験の後に書かれる歴史へ—イタリア歴史学におけるレジスタンス神話と修正主義」(『日本の科学者』51号、2016年)を参照されたい。
- (6) カルロ・ギンズブルグ『ベナンダンティ』

- (せりか書房、1986年、竹山博英訳)；カルロ・ギンズブルグ『夜の合戦』(みすず書房、1986年、上村忠男訳)。
- (7) カルロ・ギンズブルグ『裁判官と歴史家』(筑摩書房、2012年 [平凡社、1992年]、上村忠男・堤康德訳)。
- (8) ソール・フリードランダー編『アウシュヴィッツと表象の限界』(未来社、1994年、上村忠男・小沢弘明・岩崎稔訳) 所収。
- (9) Dino Messina, 'Carlo Ginzburg: mio padre Leone filologo della libertà' in *Corriere della sera*, 1 maggio 2009, https://lanostrastoria.corriere.it/2009/05/08/carlo_ginzburg_mio_padre_leone/ (2020年10月31日アクセス)。
- (10) ナタリーアは戦後エイナウディ社で編集の仕事をしていたとき、『これが人間か』の原稿を却下したという。「単純に、そのときの彼女には耐え難かったからかもしれない」。Cynthia Zarin, 'Hiding in plain sight: Natalia Ginzburg's masterpiece' in *The New Yorker*, June 22, 2017 <https://www.newyorker.com/books/page-turner/hiding-in-plain-sight-natalia-ginzburgs-masterpiece> (2020年10月31日アクセス)。